

西上州の山岳信仰 中

Mountain Worship in the Nishi-Joshu region 2nd

堀 越 教 之*

Kyoshi Horikoshi

キーワード：山岳信仰，普寛行者，普寛講，御嶽信仰，金剛萱（青倉），四ッ又山，秋葉山，時丸御嶽山，日暮山

Key words : mountain worship, Fukan performer, Fukan fraternity, Mt Ontake Worship, Mt Kongoukaya,

Mt Yotumata-yama, Mt akiya-san, Mt Tokimaru Ontake-san, Mt Nikkura-yama

はじめに

「下仁田町自然史館 研究報告 第7号 2022」に『西上州の山岳信仰 上』として総論を述べ、山名2箇所を記載した。小沢岳と兄倉山である。

今回はその続として、金剛萱、四ッ又山、秋葉山、時丸御嶽山、日暮山の御嶽信仰を記載した。

西上州の山岳信仰とは言え、宗教活動はほとんど無くなっている。江戸時代後期には、神道と仏道は一体であったが、明治時代から神仏分離の思想が深まり、山岳信仰も大きく分離された。

普寛行者を信仰した仏教山岳信仰関係と現状の山岳信仰を述べさせて頂く。

金剛萱（青倉御嶽山）の御嶽信仰

金剛萱（青倉御嶽山）

御嶽信仰により、各地に御嶽山が登場するのが江戸の後期である。下仁田町青倉地区にも、実力者の先達が存在した。木曾御嶽山の神や権現を、居住地に招来し、近くの山を霊場とし修行とするため金剛萱が選ばれ、青倉御嶽山とよばれた。標高は 788 m である（第1図）。

金剛萱は、栗山谷と青倉谷の間の山域にあり、近



第1図 宮室の富士浅間山から金剛萱をのぞむ

年、山頂下の尾根から旧石器が発見されて話題になったが、古代の人々は金剛萱の尾根を街道としていたと思われる。金剛萱への登山道は、下青倉の日陰の沢づたいの道、上青倉の塩の宮火とぼし尾根、赤谷の白石石灰工場の脇道、さらには土谷沢から登る道があったという。御嶽山信仰としての道は、上青倉の塩の宮火とぼし尾根を登る道であった。諏訪の森の諏訪神社を起点にしたと考えられる。

2023年2月10日受付。2023年2月20日受理。

* 〒370-2615 群馬県甘楽郡下仁田町宮室61番地 常光寺

金剛萱の石造文化

山頂の石造物

山頂に6基の石造物がある。内3基は石宮である(第2図)。御嶽山座王大権現の立像が最も高い位置



第2図 金剛萱山山頂



第3図 座王大権現
(慶応元年 願主・神戸兵左工門)



第4図 大日如来座像
(慶応二年)



第5図 智剣印を間違えた
大日如来 (慶応二年)



第6図 正しい智剣印



第7図 金剛萱の峰 役行者石像 神変大菩薩
(慶応二年 願主・神戸善介)

に建ち、慶応元(1865)年の建立であり、願主は神戸兵左工門の名が記されている(第3図)。以前紹介した、宮本講中の大社長神戸惣三郎の関係者で、上青倉赤谷地区で活躍した先達と思われる。

座王大権現や石室に背を向けて、智剣印を結ぶ大日如来座像が二体鎮座する。共に慶応2(1866)年の建立である。向かって右には、願主茂木治左衛門、左の大日如来には願主神戸兵左衛門・清水新左衛門の名がある(第4、5図)。これらの方がたは上青倉地域在住であった。

大日如来の印象は本来、左の人差し指を立て、これを右手の全指でささえる姿である。しかし金剛萱のこれら2体の大日如来石像の内の1体である第5図は、右手と左手の指の取り方が逆に彫刻されていて、第6図(第4図の拡大)が正しい姿である。

尾根道の石造文化

山頂に向かう表参道は火とぼし尾根であり、現在も尾根上部には石造物が点在する。

精巧な役行者の座像がある(第7図)。「神变大菩薩慶応二年願主神戸善介」の文字が刻まれている。神变大菩薩とは、役行者(役小角)のことで、没後千百年に当たる寛政11(1799)年に光格天皇が諡号したものである。

金剛萱で最も古い御嶽教関連石造物は普寛行者座像であり、台座に文化4(1807)年の文字が見える。下仁田町内でも2番目に古いものであり、普寛行者



第8図 金剛萱尾根の普寛行者像（文化四年）

の石像では下仁田で最も古いものである。この普寛行者像が行方不明になったという話を聞いたので、盗難に遭ったかと行ってみると台座から15メートルほど下に落下していた。元の台座に戻す力もなく、それ以上落下しないよう大樹の根元に鎮座して頂いた（第8図）。

また、頂上直下に不動明王の座像がある。「慶応元年十一月願主宮本講中」の銘がある。

諏訪の森との関係

御嶽教では登山の前に、「御座立て」という儀礼を行う。御嶽講社の中核には、中座、前座及び脇座と呼ばれる行者が存在し、役割分担をしながらも互いに協力しあって「伺い祈祷」を行い「神のお告げ」などを引き出すシャーマニズム的呪術宗教的儀礼である。

金剛萱に登山する前に、この「御座立て」を行った場所が諏訪の森であったと考えられる。

諏訪の森には、多くの御嶽教関連石造物が建立されている。代表的なものを下記に示す。

- ① 御嶽山神石室 蔓延二（1861）年
- ② 二面六臂三寶大荒神石像 元治元（1864）年
- ③ 一面八臂弁財天石像
- ④ 飯綱大権現（秋葉大権現）石像（同じ尊像）
- ⑤ 大日如来
- ⑥ 恵比寿天
- ⑦ 普寛行者石像 等

小結

金剛萱は、青倉御嶽山の名で親しまれ、下仁田地域では早い時期に御嶽信仰登山の山として開かれた山域である。青倉地区の字清水、白倉の周辺には、早い時期から普寛行者の流れを組む、宮本講の先達が活躍していた記録があることから、御嶽信仰の先駆的役割を果たしていたものと思われる。

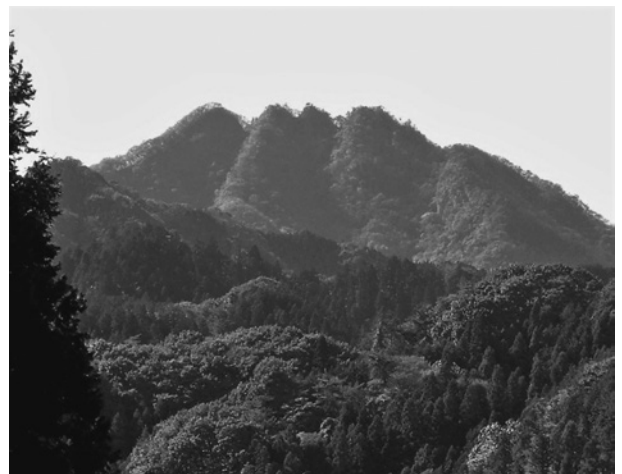
四ッ又山の御嶽信仰

四ッ又山の由来

四ッ又山は不思議な山である。標高は 899 m しかないが、安中市や高崎市から美しい山容が見え、新幹線の車窓からも眺められる。このことから下仁田富士と呼ばれている。

しかしこの山は、かつては下仁田の山ではなかった。昭和30年に、南牧村の一部の下郷地区が、下仁田町と合併することによって下仁田町の山となったのである。今でも山頂と尾根をもって、下仁田町と南牧村との境を形成している。

山頂は五峰から成り、四つの又が存在することから四ッ又山の由来がある。しかし下仁田町内や宮室・大桑原あたりからの山容は、四峰又は三峰にしか見えない。山頂に立っても四峰という感じである。五峰目が低いためであるが、梅沢峠を超えたあたりから眺めると、五峰としての存在が確認できる（第9図）。



第9図 梅沢峠からの四ッ又山

四ッ又山の石造物

石造文化の観点からも、四ッ又山は南牧村の山である。四ッ又山の尾根や山頂に残る石造物のほとんどは、南牧村村民の御嶽信者が奉納したものであり、御嶽教の神々は、下仁田町に背を向け、南牧村を見下ろして点在するのである。

天狗の石造物

令和元（2019）年10月12日～13日、台風の大雨が西上州を襲った。下仁田町下郷から四ッ又山に登る道は、この台風により大崩れを起こしてしまった。この道は今でも登山禁止となっている。かつてこの道は最も登りやすい登山道であった。

下仁田側の下郷から鍾乳洞の前をとおり、稜線に登りつめた鞍部に最初の石造物が登場する。小さな天狗の石造物と「大天狗」と彫られた文字碑である（第10図）。「大天狗」碑には「明治三十四年 願主 千原村 峯崎武」と刻まれている。西上州の御嶽信仰の山岳の中で、天狗を祀るのは四ッ又山のみであろう。



第10図 大天狗
（明治三十四年 願主・千原村 峯崎 武）

第二峰下の烏天狗

口伝によれば、下郷地区の鍾乳洞手前の杉林の中に、高く石垣が積まれた場所があり、ここに「天狗さん」と呼ばれる行者が住んでいた。一本歯の下駄を履き、四ッ又山を道場として修行をしていたという。

また天狗さんの家族が宮室地区の古道で、「天狗まんじゅう」という名の饅頭を売っていたという。

この話は古老から聴いたものであるが、明治時代の後期の話のようであり、天狗さんが御嶽教の行者であったかは定かでない。南牧村野々上地区は、南牧側からの登山口であったが、ここにも大天狗の文字碑がある。

山頂第二峰の尾根に烏天狗の像がある（第11図）。「明治三年 願主 茂木喜十郎 茂木伊左衛門」と彫られている。烏天狗のルーツは、インドのヒンドゥ教の神様ナラヤン神の乗り物であるガルーダが変化したものと思われる。



第11図 烏天狗像 山頂第二峰

普寛行者の像

関東に於ける御嶽信仰の開祖、普寛行者の石像が四ッ又山に一体のみ存在する（第12図）。下仁田町南牧村の境の尾根の鞍部にあり、下仁田側から登山すると気づかない場所にある。



第12図 普寛行者（明治五年 願主・工藤重三衛）

これには「明治五年 願主 工藤重三衛」と刻まれている。普寛行者石像の右手には、青銅の錫杖が差し込まれていたというが、大東亜戦争の時、供出されたと古老から聞いたことがある。今は何も持っていない。

不動明王座像

鞍部から急な山道を登り、第一峰頂上近くに、立派な不動明王座像の石像が祀られている（第13図）。「明治四年 願主 茂木源七」と刻まれている。不動明王の持つ剣のみが鉄製である。



第13図 不動明王 四ツ又山登山道
(明治四年 願主・茂木源七)

山頂に立つ御嶽教の神々

山頂に立つと、一峰から三峰が立派に存在して、それぞれの岩峰は、御嶽教の神々の御座となっている。見事に山頂の地形を利用している。

第一峰は下仁田方面から見ると左側であるが、南牧側から見ると上座である右となり、八海山提頭羅神王が祀られている（第14図）。第二峰は主神である御嶽山座王大権現が祀られている（第15図）。第二峰の石造物のみ文字が読み取れ「明治三年願主宮本講」と刻まれている。

第二峰を少し下った尾根に石造物があり、前述した烏天狗はここにある。他に弁財天梵字種字碑がある。これには「明治三年 願主工藤清一左衛門」の文字が残る。

第三峰には三笠山刀利天宮が祀られているが、正



第14図
第1峰の八海山提頭羅神王
(明治三年)



第15図
第2峰の御嶽山座王大権現
(明治三年 願主・宮本講中)



第16図 第3峰の三笠山刀利天宮 (明治三年)

面からは礼拝出来ない場所に立っている。絶壁であるため、写真も側面からしか撮ることが出来ない（第16図）。

第一峰から第三峰までの御嶽三座神の石造物は、その彫方が同じであることから、宮本講により明治三年に建立されたものであろう。

第四峰には石室が一基祀られている。これは御嶽信仰では無く、富士信仰の石室と思われる。「富士浅間神 明治四年 信州佐久郡白田 堀田屋新九郎」と彫られている。

小結

下仁田ジオパーク内クリッペの構造で知られる四ツ又山は、かつて信仰登山の山であった。

山に奉納建立された石造物の年代から観て、江戸

期のものは無く、明治初期から始まったと思われる。その山容も美しく、下仁田富士の愛称で親しまれているが、信仰文化は南牧村の山である。御嶽教普寛行者系の宮本講中を中心として南牧村村民の信仰を集めて、明治初期から昭和十年代まで栄えた信仰文化を知る事が出来る。

御嶽教ばかりでなく、富士信仰の様相も見え、天狗信仰も覗かせている。「天狗さん」の伝承も忘れら去られてしまうであろう。可愛い天狗像と大天狗の文字碑、そして烏天狗像と共に、天狗さん伝承も後生に伝えたいものである。

御嶽信仰 秋葉山と仏岩山（東野牧 馬居沢）

山の名称

秋葉山の読み方は「あきばさん」が普通であるが、西上州東野牧の馬居沢では、「あきやさん」と呼んでいる。秋葉山が国道254号線から見えるのは東野牧の一部しか見えない。馬居沢に入らないと見えない風景である（第17図）。

山頂には、仏岩山「ごしゅうざん」と山名が表記されている。仏岩山を「ごしゅうざん」とは読めないが、この山頂から五州の山が見えることから「五州山」と言ったのではないかと思われる。すなわち山頂左から見て、信州、上州、越州、下州、武州の五州の山が見える事から「ごしゅうざん」と呼んだと考える。



第17図 仏岩山と秋葉山

秋葉山への登山道

馬居沢から山頂へ登る道が3ルートあった。第1は、馬居沢から直接沢を登る道である。この道を行き、山頂の直ぐ下の岩崖に山岳信仰石造が祀られ、三角穴と呼ばれている。第2のルートは集落からすぐ尾根伝いに直登するルートで、危険は少ない。また、馬居沢奥手の大倉から尾根に上がる道にも危険がない。山岳信仰者の多くの人々が登ったのはこの第2の尾根道である。さらに、第3のルートは、山頂の裏側にあたる馬居沢上手地域の上流から登る急傾斜の道であった。

三角穴

三角穴^{さんかくあな}の岩塊へは、危険な沢を横切る道である。深く陽が差し込まない谷で、くらやみ（暗闇）とも呼ばれている。ここには大小三つの岩室がある。岩塊を越え小室があり中央には広い岩室、さらに岩を登ると小室がある。

岩塊岩室には陽があたらないが、外を眺めると妙義山の奇岩や大桁山など西上州の山々が見える。三角穴でみられる主なものは、次の3点である。

- ① 自然石文字碑「虚空蔵尊」 手前小岩室
- ② 石祠三基
石祠「慶応三年 富村施主 小井土六右エ門
茂左エ門 万次郎」
- ③ 上岩室 石祠三基

秋葉山の山岳信仰

秋葉山信仰の本山は「秋葉山本宮秋葉神社」であり、飛鳥時代後期、和銅2（709）年の創建と伝えられている。静岡県浜松市天竜区春野町にあり、天竜川の上流で赤石山地の最南端の秋葉山（標高 885 m）の山頂付近にある。西上州の秋葉山の名称にも、この本山からの信仰があったものと思われる。

西上州秋葉山への登山道は、尾根の西に向かい山頂に登る。山頂への山道のはじめに、山岳信仰以前のものであると思われる石室（自然神信仰山の神）がある。

さらに細い石碑があり、頭がかけているが「○波羅山」と読める。おそらく「意波羅山^{ひはらさん}」と書かれたものであり、関東越後の御嶽信仰者普寛行者が示し

た、地元秩父の意波羅山が表現されているものと思われる。

そこを超えると御嶽山岳信仰の石造物が祀られている(第18図)。まずは御嶽山三神である。

- ① 八海山提頭羅神 (50 cm) 「慶応二年 南牧櫻村住 藤原那吉作彫之」
- ② 御嶽山蔵王大権現 (60 cm) 「村郷中安全」
- ③ 三笠山刀利天宮 (50 cm) 「講中行者建之 發世話 藤原喜道」

三笠山刀利天宮は右手に錫杖を持ち、左手に繩を持っているのが普通であるが、秋葉山の三笠山刀利天宮は持ち物が反対である(第19図)。



第18図 秋葉山山頂の石造物



第19図 秋葉山と兄倉山の三笠山刀利天宮

秋葉山の大日如来

御嶽山三神に並んで大日如来座像が石仏として祀

られている(第20図、第21図、口絵2-①)。

「慶応三年三月吉日拜 施主 小井土万次郎 須田幸次郎 小井土弥五郎」と縦書きで彫られている。



第20図 大日如来
(慶応三年三月吉日拜
施主・小井土万次郎、須
田幸次郎、小井土弥五郎)



第21図 智剣印
(第20図の拡大)

尾根に設置された御嶽山信仰石造

次に概要を示す。建立年不詳は慶応2(1866)年位とおもわれる。

- ① 石宮3体 建立年不詳
- ② 水天宮(丸石 建立年不詳)
- ③ 日野大権現
施主 高田太右衛門 建立年不詳
- ④ 摩利支天 丙寅(慶応2年) 小井土龍助(第22図)
- ⑤ 白川大権現 施主 羽田平左衛門



第22図 摩利支天(慶応二年・小井土龍助)

- ⑥ 富士僊元神（富士浅間神） 慶応二年
施主 小河原村 佐藤左座衛門
- ⑦ 八海山提頭羅神弁財天 慶応三年建立
施主 小井土万次郎 須田幸次郎
小井土弥五郎

登山道にある仙人窟

馬居沢上手地区から秋葉山への登山道を登った事はなく、下った事がある。下るとすぐに最大の岩壁に大きな洞窟が現れ、仙人窟と呼ばれている。その上にも二連の洞窟がある。

仙人窟の中に入ると間違いなく御嶽信仰で、普寛行者と不思議童子が祀られている。「慶應元丑戌九月建立 施主神戸松一郎」と彫られている。その他御嶽信仰の一部信仰と見られる三十六童子の数個の文字が刻まれており、標高の低い位置からの順に次のものが記録されている。

- ① 質多羅童子（彫られていないが八番である）
- ② 召請光童子「九番施主言吉村金井仙吉」
- ③ 羅多羅童子「十一番施主羽田」
- ④ 師子光（獅子光）童子「慶應二年四月吉祥日十四番」
- ⑤ 法粹護童子「十九番」

仏岩山の山岳信仰

山頂には、一体の仏像が建立されている（第23図）。仏像は十一面観世音菩薩立像である（第24図）。石宮裏面には三行の文字が書かれている。「胎蔵界傳三部 ○○○○辰宝 ○○○○○至」であ



第23図 仏岩山 十一面観世音菩薩



第24図 十一面観世音菩薩願造

り、十一面観世音菩薩に胎蔵界の曼荼羅が唱えられたと思われる。建立された年号も不明である。

小結

下仁田町馬居沢から登る秋葉山を書いた。

馬居沢に住む住民は、今でも山岳信仰は続いている。毎年4月の第2日曜日には、三角穴をはじめ、秋葉山を信仰のために登っている。さらに時間のある人は、仏岩山に登り十一面観世音菩薩を祈っている。信仰を忘れられている御嶽教も、ここだけは年1度であるが、山岳信仰として存在する。

西野牧・時丸の御嶽信仰

県道沿いの石造物

西野牧初鳥屋の手前に時丸と呼ばれる山域がある。時丸御嶽山である。かつて御嶽神社までの登山道尾根道には、多くの石造物が安置されていた。軽井沢に至る和美峠の県道整備のため、尾根に点在していた石造物は、一カ所にまとめられた。

現在県道脇の聖地には、御嶽教関係の石造物が24基並べられている。文字碑が多く、御嶽教の先達の霊を「霊神」として祀ったものが多い。尊像2体があり、その1体は時丸御嶽山開山の祖・柳澤利廣行者の尊像である（第25図）。



第25図 時丸御嶽山開山の祖・柳澤利廣行者の尊像(左)

尾根の石造物

県道を横切り、県道の擁壁に付けられた階段を登ると、かつての信仰登山の道があったはずであるが、今は全く無くなっている。けもの道すら付いていない。林の中の木立を頼りに、登りやすいところを登る。

標高にして 150 m ほど登った尾根に、1体の石像がある。台座に「一心行者」と刻まれている。顔が前方に突き出た異様な尊像である。背景に日暮山が美しく映えている(第26図)。



第26図 尾根の石造物 尊像

時丸御嶽神社の石造物

ここから岩壁の付け根の道を進むと御嶽大神境内にでる。現地の石を使い野積みにした石垣の上に、御嶽神の社があったが、平成26年2月15日の豪雪により倒壊してしまった。

境内の入り口に一对の石灯籠があり、明治9(1876)年の奉納の文字が刻まれている。境内の北側は岸壁

で、直下に雨露の当たらない空間があり6体の石造物が安置されている。かなり特徴ある石造物である。中でも注目されるのは、養蚕信仰の神、絹笠明神である(第27図)。左手に桑の枝を、右手には種紙を持っている。台座正面は牡丹の彫刻が見事であり、左側には明治15(1882)年の寄贈であること、右側には、矢川の生まれの佐藤紋が寄贈した旨の文字が刻まれている。

次に特徴ある石造物は、御嶽山座王大権現(国常立尊)である。そして不動明王立像がある(第28図)。不動明王には、明治35年建立の銘がある。



第27図 絹笠明神(明治十五年一月建立)



第28図 不動明王(明治三十五年建立)

このほか、文字碑が2基ある。熊野皇大神と日野大明神である。

熊野皇大神は最も古く、「嘉永元年7月 佐藤善之□」が記載されている。

日野明神は実存の御嶽教の行者であったが、木曾御嶽山の薬草を採集し丸薬を開発した。長野県にある日野製薬の元祖であり、後に神として祀られた人である。日野大明神は、馬居沢秋葉山にも存在する。

小結

時丸御嶽山には、33基の石造物が存在する。文字碑も多く24基を数える。そのほとんどが、御嶽教の行者や先達を敬うために、後世の人が建立したものである。

銘のあるもので最も古いものは、熊野皇大神である。次に石灯笼一对の明治9（1876）年である。最も新しい石造物は、平成14（2002）年である。西上州では最も長く続いた山岳信仰であると言えるかもしれない。

しかし、記録的豪雪により、御嶽神社の社が崩壊し、御嶽教の地域的信仰が衰退した現在、社の再建は不可能であろうことが残念である（第29図）。



第29図 時丸御嶽山の御嶽神社

日暮山の山岳信仰

日暮山

日暮山は「につくらやま」と呼ばれ、地元では「矢川富士」とも言われている（第30図）。山頂は下仁田田町であるが、長野県軽井沢との境の近くに位置し群馬の西方である。近年「群馬百名山」と記されている。標高は1207 mで、軽井沢の高原と約200 mしか変わらない。



第30図 初鳥屋からみた日暮山

日暮山の山岳信仰

- 1 日暮山山頂自然神信仰山の神の祠
- 2 御嶽神社石碑
- 3 石古利住命石碑
- 4 中央大日大聖不動明王石碑

小結

日暮山を山岳信仰と祀った住民は、西野牧の高立、萱倉、小平の人達であった。山頂には山の神の祠があるが傾いている。その近くに「御嶽神社」と書かれた石碑がある（第31図）。これより下に「石古利住命」と書かれた碑があるが、御嶽教信者の墓であろう。さらにその手前には「中央大日大聖不動明王」と書かれた石碑がある。石造石姿は無く、すべて石碑である。



第31図 日暮山 山頂の石碑

まとめ

「西上州の山岳信仰 上」（堀越 2022）のまとめに記載したとおりであるが、「中」に記載した山岳信仰御嶽教の思料の5山の資産等について整理する。

- 1 金剛萱の青倉御嶽山は、青倉地区に住む住民の信仰であり、石造物も大切なものであり、永く保存されたい。
- 2 四ッ又山の山岳信仰石造物は、すべて南牧村の山岳信仰者が奉納建立したもので、南牧方向を向き、下仁田方面には背を向けている。
- 3 秋葉山の御嶽信仰は、年に1度であるが下仁田町馬居沢の住民を中心として山岳信仰が行われている。
- 4 西野牧・時丸に、最後の御嶽教行者の墓が建立された。平成14（2002）年9月3日82歳で遷化した関口菊雄であり、森菊霊神と彫られている。
- 5 日暮山の山岳信仰石造物はなく、石碑3点のみである。
- 6 下仁田町に平成時代までに活躍した御嶽教行者がいた。大桑原に在住した岩崎鶴吉氏であり、御嶽教中教正である（第32図）。平成23（2011）年11月13日遷化されるが、仏教の院号道号戒名位号で葬儀が行われた。



第32図 御嶽教行者 岩崎鶴吉御嶽中教正護摩供
平成二年春彼岸・兄倉山麓

参考文献

- 安中山の会編（1990）群馬の山歩き130選. 上毛新聞社, 265p.
 五來 重（1970）山の宗教=修験道. 淡交社, 260p.
 堀越教之（2022）西上州の山岳信仰 上. 下仁田町自然史館研究報告, 7, 11-20.
 岩鼻通明（2017）出羽三山 山岳信仰の歴史を歩く. 岩波新書, 219p.
 前田良一（2006）役行者. 日本経済新聞社, 402p.
 宮家準編（1985）御嶽信仰. 民衆宗教史叢書. 雄山閣, 300p.
 中村 元・久野 健編（2002）仏教美術事典. 東京書籍, 1035.
 中田祝夫（1980）日本霊異記（下）. 講談社学術文庫, 320p.
 南牧村誌編さん委員会編（1981）南牧村誌. 南牧村, 1543p.
 南牧村文化財調査委員会編（1991）南牧村の石造文化財. 南牧村教育委員会, 62p.
 錦織亮介（1983）天部の仏像事典. 東京美術, 288p.
 御嶽教大本庁宣教部（1979）御嶽教の歴史 開教九十五年の歩み. 御嶽教大本庁, 272p.
 下仁田町教育委員会編（1976）下仁田の石造文化. 下仁田町教育委員会, 111p.
 菅原信海（2001）日本人の神と仏. 日光山の進行と歴史. 法蔵館, 259p.
 菅原信海（2003）日本人と神たち仏たち. 春秋社, 226p.
 菅原信海（2007）日本仏教と神祇信仰. 春秋社, 248p.
 菅原壽清（2002）木曾御嶽信仰—宗教人類学的研究—. 岩田書院, 354p.
 ウェストン W.（山崎武生訳）（1976）日本アルプス・登山と探検. 日本山岳名著全集, 10, 三笠書房, 304p.
 宇治谷孟（1992）続日本紀（上）全現代語訳. 講談社学術文庫, 432p.
 和歌森太郎編（1975）山岳宗教の成立と展開. 山岳宗教史研究叢書. 名著出版, 388p.

(要 旨)

堀越教之(2023)西上州の山岳信仰 中. 下仁田町自然史館研究報告, 8, 1-12.

「上」に記した小沢岳, 兄倉山の2山に続き, 「中」では金剛萱, 四ッ又山, 秋葉山, 西野牧・時丸, 日暮山の5山を記載した. 下仁田町にはこのほかにも山岳信仰と思える山はあるが多くの資産等は無い. 下仁田町の山岳信仰御嶽教に関連する山は, この7山である.